

魅力のある学校に関する実践

—「居場所」づくりと「絆」づくりを通して—

栢森和重*

Practice of the attractive school

— Through whereabouts and bonds —

Kazushige KAYAMORI*

要 旨

生徒にとって魅力ある学校とはどんな学校か。「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」等の「学校生活満足群」や学校独自でおこなっている「生活アンケート」の満足度を検証して、どのような取組により満足度や魅力ある学校にアプローチしているのかを明らかにした。これらにより、つながりが生徒たちの満足度に大きな影響を与えていることがわかった。個々の生徒の課題に向き合い、生徒と教員の信頼関係を構築することにより学校における居場所をつくり、生徒と生徒がつながる場を設定し教員が仕掛けていく絆づくりの取組により、生徒たちの自尊感情が高まり、意欲を持って学校生活を送ることができ、学校に魅力があると捉えていることがわかった。

キーワード：魅力的な学校、居場所づくり、絆づくり、自尊感情、つながり

1. はじめに

職員室のデスクで仕事をしていると音楽室から子どもたちの歌声が聞こえてくる。「今日もよく歌っているな。」と少しほっこりとした気持ちになる。静かな校舎に生徒たちの歌声が日常の学校の風景として定着している。チャイムが鳴って授業が終わる。すると生徒たちは少しがやがやとにぎやかに職員室前の廊下を歩いて教室へと戻っていく。何人かの生徒が歌を歌いながら帰っていく。時には美しくハモリながら…。授業中に来客があると帰り際によくこんな言葉を投げかけられた。「今日は遠足か何かですか。」授業中はそれほど授業に集中して静かなのである。

ここで取り上げられる2つの中学校は恒常的な「荒れ」に悩まされる学校であった。特に、2つのうちの1校は県内で最も「荒れ」ている学校と揶揄されたことがあったほどであった。14年ぶりにこれらの中学校に戻ってきたとき、正直その変貌ぶりに驚きを隠せなかった。この2校の中学校での実践を踏まえ、どのように「荒れ」を乗り越え、「魅力のある学校」づくりに取り組んだのかをまとめ、考察する。

(1) 学校を取り巻く環境と「荒れ」の要因

2000年前後、当該中学校には、大きな荒れがあった。2つの中学校がある市は大都市のベッドタウンとして、昭和40年代後半から人口が急増。平成12(2000)年をピークに今は減少傾向をたどっている。当時は、市内5校のうちの2校が過大規模校で1学年が10クラスを超える規模であった。学校の立地としては、従来の農村地域や旧来の商業地域を含む校区に、新たに造成された住宅地が加わっていた。市全体としても旧来の地域と新たな住民の混住が進んでいった時代である。

* 三重大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻

(2) 魅力のある学校

公立の小中学校へは多様な子どもたちが通ってくる。かつてのような「荒れ」はかなり収まってきたものの、学校には旧来からの課題に加え、新たな課題が多くある。学習内容の多様化なども含んだ学力の問題、教育的に不利な立場にある子どもたちの増加などである。学力の問題は子どもたちを取り巻く環境の問題とは切り離して考えることができないものである。両者は密接に、相互的に関係している。

文部科学省国立教育政策研究所が、不登校・いじめの未然防止を目的として平成22年度より5期(1期2年)にわたっておこなっている「魅力ある学校づくり調査研究事業」においては、「授業や行事等を通した『居場所づくり』や『絆づくり』の取組」の大切さが指摘されている。(文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 平成29年1月 第3期「魅力ある学校づくり調査研究事業」(平成26～27年度)報告書 はじめに) これは不登校・いじめの未然防止を目的としているが、不登校やいじめを児童や生徒、学校の課題としてとらえたとき、「居場所づくり」や「絆づくり」がそれらの課題を抱える生徒に効果的であるならば、他の生徒にももちろん効果的であるはずである。「居場所づくり」や「絆づくり」の取組が普遍的なものであれば、不登校・いじめ以外の教育課題解決にも有効であるはずである。

(3) 検証方法

学校にもアカウンタビリティ(説明責任)が求められるようになってきた。そこに学校の評価が制度として導入され、学校評議委員会や学校評価委員会等からも評価を受けるようになる。

◆Q-U調査

三重県では、「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」や「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU」が小中学校を中心に導入されてきた。Q-Uは教師による観察法以外で学級集団の状態をアセスメントする有効な方法と考えられた。Q-Uにおける「学校満足度尺度」の中の「学校生活満足群」は、「トラブルやいじめなどの不安がなくリラックスできている」「自分が級友から受け入れられ、考え方や感情が大切にされていると感じられる」群である。すなわち、学級内に自分の居場所があり、学校生活やもろもろの活動を意欲的に送っていると考えられる。1年に2回この調査を行う。

◆生徒アンケートおよび保護者アンケート

生徒アンケートは1年に2度、保護者アンケートは1年に1度行っているところが多い。質問項目に検討は加えるものの、経年変化も考察できるよう大幅な変更には慎重にあたっている。

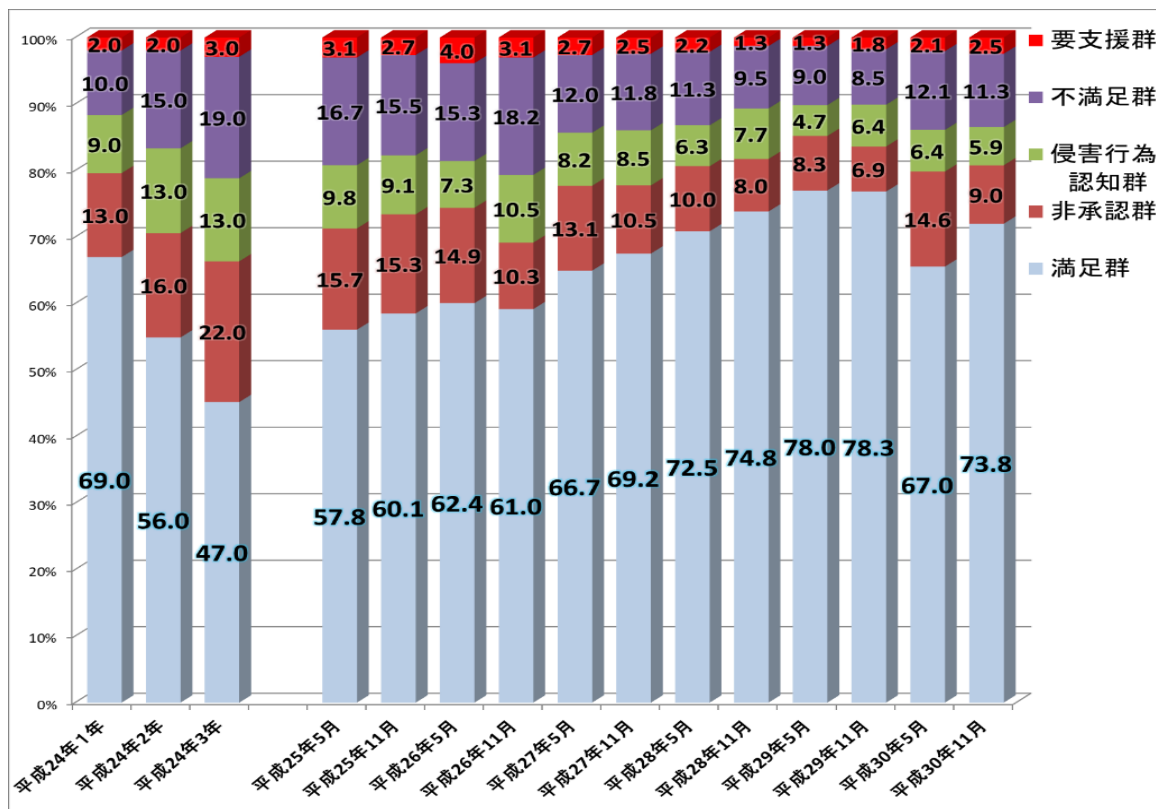
(4) 検証結果

当該中学校のQ-U調査結果の推移。平成24年度は学年ごとの数値となっているが、平成25年度からは5月と11月の調査結果となっている。「満足群」の全国の平均的な数値が30～40ポイントであることからすると、学級や学校に対する満足度が高く、おおむね魅力ある学校と考えられる。

(5) 検証に対する考察

これらの調査やアンケート項目も踏まえながら、教職員全員でプランを立て、全員で実行し、その結果を学級、学年の教職員全員、学校の全教職員で点検し、取り組みを見直す。学期ごとの教職員の観察法を中心とした振り返りだけでなく、数値による振り返り・検証は一定の客観性も有り、意味がある。この検証方法は「PDCAサイクル」に基づいた取組・検証であるが、大切なことはプランを立てるにあたっての生徒の実態の把握である。前述のように子どもたちを取り巻く状況は多様であり、学力や経済的な面だけでなく、多くの面での格差が如実になってきている。そのこのところを抜きにしてのプランはあり得ないし、検証も全体的な数値だけに一喜一憂するだけでなく、一人ひとりの生徒へのアプローチが欠かせない。

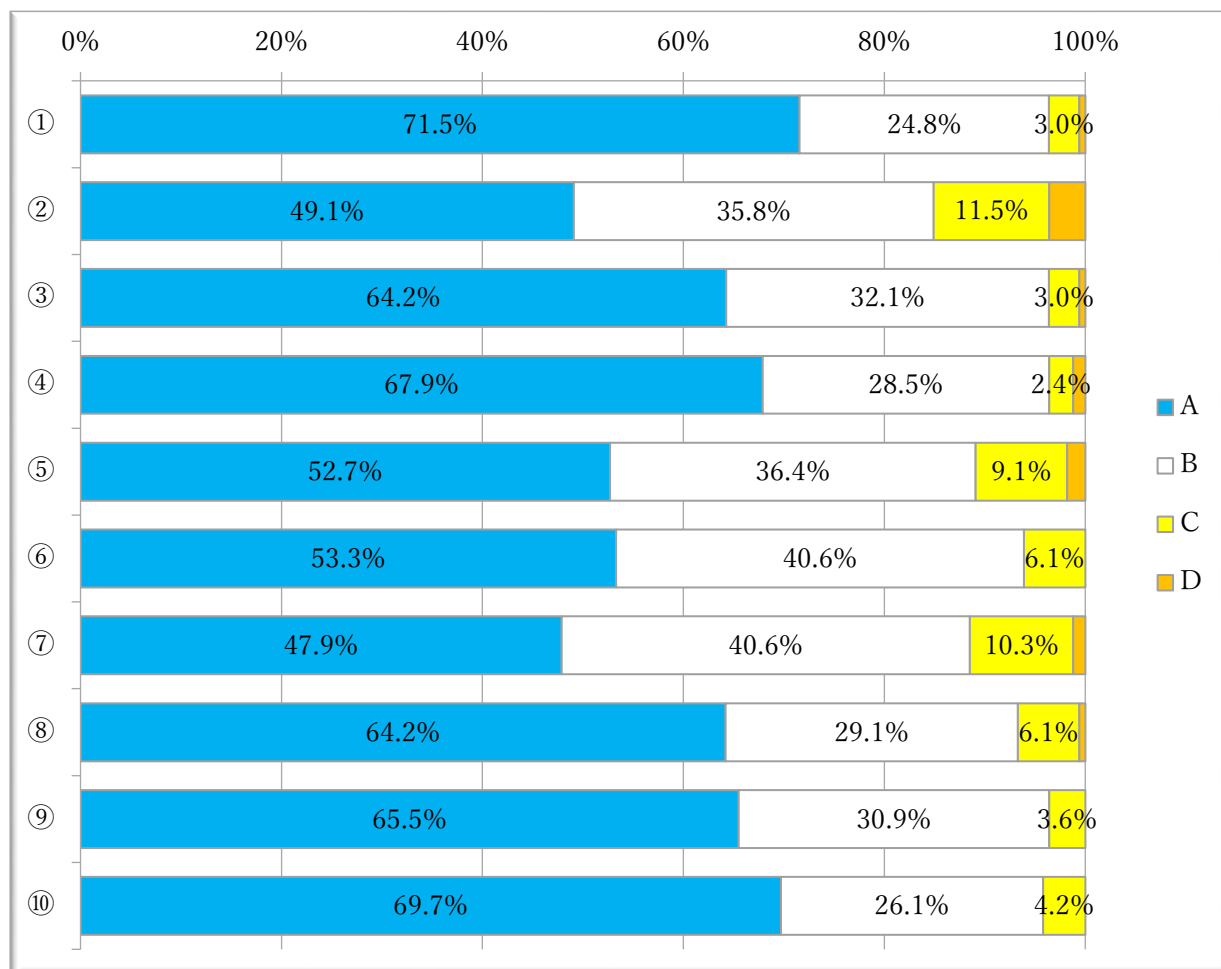
魅力のある学校に関する実践



Q-U 調査結果の推移

1. 学校生活を楽しく、有意義に過ごすことができる。
 2. 先生に悩みや迷っていることを相談できる。
 3. 生徒の間違った行動に対し、先生はきちんと指導してくれる。
 4. 清掃活動や委員会・係活動にしっかり取り組んでいる。
 5. 誰とでもあいさつを交わすことができる。
 6. 授業はわかりやすく、集中して取り組んでいる。
 7. 予習や復習など、家庭学習に意欲的に取り組んでいる。
 8. 学級のみなどと話し合ったり活動したりすることは楽しい。
 9. 相手の気持ちや人権を大切にしている。
 10. 学校・学年の行事を、なかまを大切にしたりとくめている。
- A よくあてはまる B ほぼあてはまる
C あまりあてはまらない D 全くあてはまらない

生徒アンケート (学校生活アンケート)



平成 30 年度第 2 回生徒アンケート（12 月）結果

2. 個々の課題に向き合う（居場所づくり）

(1) 朝の読書タイム・健康チェック・教職員間の情報の共有

教室での一日の始まりは、この読書から始まる。部活動の朝練習を終えて教室へ入ってくる生徒、チャイムが鳴る直前に飛び込んでくる生徒…。担任は教室で子どもたちを迎える。担任以外の教員は校門や玄関先、昇降口などで生徒を迎える。「おはようございます」と挨拶をするとどんな挨拶がかえってくるのか、どんな顔をして学校へ来るのか、しぐさに変化はないか。どの教員も子どもの様子をつかみ取ろうとする。そして、情報交換。「○○はなにかあったなあ。話さいてやらなあかん。」心配なときは教室まで様子を見に行ったり、担任に耳打ちをしにいたりする。

職員室からも情報がどんどん入ってくる。「◇◇は欠席連絡がありました。熱が出たって、お母さんから。」「□□が学校へ行き渋ってるってお母さんから困って電話あって、教頭先生がお母さんの話をきいてくれています。学年で動けるものでのぞきに行ってもいいって。」チャイムが鳴って日課が始まる1時間近くも前から、職員室では保護者や地域住民、そして、生徒への対応が始まっている。

自分が読みたい本を読む読書タイムは静かである。そして、心が落ち着いて一日のスタートを切る。担任の教員は読書している様子を見ながら生徒の把握に努める。

そして、健康チェック。保健室の養護教諭から、毎日の健康状態のチェックとひと言を生徒自身が書くシートが用意されている。毎日回収して担任も目を通し、週に2回ほどは養護教諭も全生徒の健康チェックに目を通す。「あら、この子3日連続で『しんどい』って書いてるけど、保健室へは来てない。担

任の先生は話きいてやったかなあ。」このように生徒のことがいつも話題になっている職員室であることが大切である。そして、1時間目の授業が始まるまでの1時間あまりのこの時間が非常に大切である。担任だけでなくすべての教員が一人ひとりの生徒の状態を把握し、生徒に向き合う時間である。

(2)教育相談

生徒指導上の課題のある生徒は教員との接触も多く、担任に限らず断続的に教員が話を聴き、話をしている。既出の「健康チェック」のように課題が表面に出てくる前の段階で、生徒の中に起こっている変化を察知し、生徒に適切に声をかけたり、話をきいたりする。これは授業を受け持っている教科担当の教員だけでなく、学年所属の教員、部活動の担当顧問などあらゆる関わりの中から生徒の状態をつかんでいく。また、保健室や学年職員室（教室が配置されている階に設けられている学年担当教員の控え室）で生徒がポロリと心情を吐露することも多く、教員間の情報共有が大切になる。このような体制から漏れてしまうケースのために、学期に1～2度教育相談期間を設けて担任がすべての生徒と個別に話をする機会を設定している。

(3)支援の必要な生徒への対応

特別支援教育が始まって10年以上がたった。障害者差別解消法が制定され、教育現場においても合理的配慮が求められる。特別支援学級以外の通常学級にも支援が必要な生徒は一定数おり、きめ細やかな指導や対応が必要である。その根本は命への慈しみであり、一人の人間としての尊重である。生徒の課題は何で、合理的に配慮すべきことは何か、そして、どのように支援していくのか。しっかりとした生徒理解にたっておこなう。

(4)人権課題のある生徒への対応

部落問題、障がい者の人権に係わる問題、外国人の人権に係わる問題、子どもの人権に係わる問題、女性の人権に係わる問題、様々な人権（高齢者、患者、犯罪被害者、アイヌ民族、刑を終えた人・保護観察中の人、性的マイノリティ、ホームレス等の人権に係わる問題、インターネットによる人権侵害、災害と人権、貧困等に係る人権課題や北朝鮮当局による拉致問題等）に係わる問題など社会にある人権課題は、そのまま学校にあると言っていい。人権課題の当事者が生徒として学校に通ってきていることも多くあり、生徒自身へ寄り添った、きめ細やかな対応をおこなっている。

(5)学習でつまずきのある生徒への対応

学習でつまずきのある個別に指導に必要な生徒には、少人数授業（T.T.、習熟度別）などを活用しながら、授業においても、個別指導する時間を見出しているが、授業外でも始業前、昼休み、放課後等につまずきを解決できるよう個別指導をおこなっている。

また、定期テスト（中間テスト、期末テスト）前には、始業前に朝補習を、放課後に補習の時間を各教科担当が設定をして、質問に応じたり学習の支援をしたりしている。これにはあくまでも生徒たちも自主的に参加するし、教科担当も自発的に時間の設定をするのだが、数学や英語についてはほぼ毎日行われる。もちろん、学習につまずきが見られ、来てほしい生徒への声掛けや参加の促しはおこなうのだが、毎日25%程度の生徒の参加がある。また、基礎学力の充実のために、たとえば英語の文法事項や国語の漢字や古文の暗誦などでは、マスターできるまで何度でも教員が付き合うというスタイルもみられる。個々の学習の課題を授業だけでなく、様々な形で生徒の「わかる・できる喜び」へアプローチしている。

(6)学習ルーム（学習室）での個別の対応

不登校傾向の生徒はどの学校においても一定数いて、その解消にも力を尽くしている。教室に入りづらい、学校に登校しづらい生徒の現状をよく把握するため、担任を中心に学年所属教員、スクールカウンセラーによる生徒や保護者との面談を重ねて、必要に応じて児童相談所や市の福祉セクションなどの

関係機関とも連携をしながら、復帰に向けた取り組みを進める。保健室登校なども一般的ではあるが、教室へ入っていくために学習ルーム（学習室）を設けてもうワンステップをつくっている。保健室へは状況に応じてクラスの友達や仲の良い子が話に来たり、教室で一緒に授業を受けることを促したりするが、この学習ルーム（学習室）は静かな環境の部屋で、学校への登校のリズムを整えたり、学校で過ごす時間に慣れていくことを大切にしている。担任や学年の所属教員がマンツーマンで学習の支援をしたり、話をしたりすることもあれば、一人でマイペースに学習を進めていることもある。この学習ルームの期間を経て教室への復帰を果たしていることも多く、一定の成果は見られている。

3. 生徒たちをつなぐ（絆づくり）

◇横のつながり

(1)授業（学びあい）

子どもたちをつなぐというと、学校行事、学級活動、生徒会活動などの特別活動や総合的な学習の時間等の中でおこなわれていると考えられがちだが、やはり学校生活の大半を占める教科学習の授業の中でつないでいくことこそが大切である。授業の中で生徒たちの言葉のキャッチボール（対話）がおこなわれる場をいかにしてつくっていくかが問われる。授業技術の向上のための研修や研究の重要性は言うまでもない。また、教科学習外に特設の授業を位置づけ、学習習慣の定着や教え合い・学び合いの場となるよう教員が支援している。

(2)学校行事（体育大会、遠足、修学旅行、社会見学、文化発表会、合唱コンクール）

学校行事は計画の段階から生徒の自主性や主体性を重んじた自治的な活動となるよう教員は意識して場を設定する。その中で、生徒たちがお互いに認め合い、高め合えるものとなるよう教員は支援し、つながりをつくり、生徒どうしの絆をつくっていく。

◇縦のつながり

(3)伝統づくり

当該中学校では「三つの伝統 あいさつ・拍手・合唱」や「三本柱 あいさつ・合唱・清掃」というものがあり、スローガンのにも使われている。学校の玄関にも掲示されていたり、生徒が使う昇降口にも掲示されていたりする。生徒会活動の中でも、生徒会のリーダーたちがこの三つの伝統や三本柱を意識して、生徒全体に話しかけることも多く、教員も折に触れて卒業生たちがこの伝統づくりや三本柱づくりに取り組んで実践してきたかのを生徒たちに伝えている。例えば、生徒会主催の4月はじめにおこなわれる「新入生歓迎行事 対面式」の場では必ずこの伝統や三本柱について生徒会長が話をし、実際に上級生が示してみせる。「清掃」が三本柱にある中学校では1年生のために掃除の仕方や取り組んでいる「無言清掃」をオリエンテーションしている。「合唱」については圧倒的な上級生の歌声を合唱コンクールだけではなくて、いろんな機会に下級生が聴く機会をつくっている。取組が低調な時は、下級生が上級生の取組を見学させてもらい、取組が引き継がれていく。

(4)小中連携（挨拶運動、ボランティアクリーン）

「中1ギャップ」の克服や小中学校9年間の一貫した教育、保育園・幼稚園を加えた学びの一体化を意図して小中の連携がおこなわれている。中学校教員による小学校への出前授業や小学生による部活動体験、小学6年生を中学校の文化発表会に招いて小中学生が交流をし、全員合唱をおこなうなど、小中の交流をつくり、身近な上級生の姿を下級生が自分の夢や憧れを持つきっかけとしたり、小学生が中学生に将来の自分の姿を重ね合わせたりできる機会としている。ユニークなものとしてはあいさつ運動とボランティアクリーンがあげられる。

あいさつ運動は、三本柱、三つの伝統を小学校にも広げていこうという取組。中学校では教職員が朝校門付近に出て生徒とあいさつを交わすのであるが、週に1度は生徒会の本部役員や生徒会生活委員会のメンバーが教員とともに校門付近に立ってあいさつ運動を展開する。あいさつを促すのぼりやたすきを活用して、互いにあいさつを交わす。中学生のほうがよく挨拶をするという実態もあり、校区の小学校へ朝、生徒たちが出かけてあいさつ運動をおこなったりもしている。また、ボランティアクリーンは「そうじ」を三本柱に掲げている中学校が取り組んでいて、出身小学校を訪問し、5・6年生と一緒に出身小学校の清掃を行うもの。小学校と中学校が連携をして取り組むことや、卒業生とはいえ、中学生が大人数で小学生が学校生活を送っている中に入り込んで活動するということの困難さもあるが、なんとか定着している。中学生になって一回りも二回りも成長した姿を小学生たちの前で披露し、一生懸命にそうじに取り組む姿を共有することで、小学生にとっても中学生にとっても大きな意義がある。

(5) 地域とのつながり

令和元(2019)年度に市内すべての中学校区の小中学校がコミュニティスクールとなった。これまでの地域住民の協力を連携・協働にまで高め、主体的、自律的な学校運営により、地域の学校として、地域に愛着を持つ児童・生徒の育成をめざしている。地域住民とともにおこなうボランティアクリーンも取り組まれていて、学校を離れて、駅周辺の清掃美化活動や道路に捨てられたごみ拾いなどをおこなっている。

4. ビジョンとPDCAサイクル

当該市教育委員会の教育長は「不登校を19年度から3年間で半減する」という数値目標を掲げ、平成19年度に県の「問題を抱える子ども等の自立支援事業」を受けて、次のような仮説を立てて不登校対策に取り組んできた。

仮説① Q-U 調査で満足群80%以上を目指した学級づくりを行う。このような学級は学校生活に対する子ども一人一人の満足感が高いだけでなく、学級内にも一体感が生まれ、子どもたちの自治力が向上する。結果として、心配なクラスメイトに互いに声をかけ合う子が出てくる。はじめと暖かさのある安心できるクラスの雰囲気等は、不登校傾向を示しやすい子どもたちにとっても居心地のよい状態をつくり、不登校を未然に予防することにつながるだろう。

仮説② 教師が気づきにくい子どもたちの心の状態をQ-U調査でできるだけ把握し、不満足群に対する早期の対応を、全教職員が共通理解し、全校体制で取り組んでいくことはとても大切であり、この段階で対応できれば、集団に戻れる可能性が高まるとともに、不登校が長期化することを防ぐことができるだろう。(河村茂雄編著 教育委員会の挑戦 図書文化社 P.101より引用)

この取組を進める中で、独自に「不登校防止対応マニュアル」を作成し、「ここまでは必ず対応しよう」という意識を共有化し、対応のばらつきをなくしていった。そして、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが平成22年度より進める「魅力ある学校づくり調査研究事業」の第Ⅲ期(平成26～27年度)を受けて、市内の1中学校区でその取組を進めた。これらの事業は不登校や不登校・いじめの「未然防止」に焦点化した取組であるが、すべての生徒にとって安心・安全で満足度の高い魅力的な学校となる普遍的な取組である。もちろん、上記の仮説を立てて、取り組みを進め、生徒たちの実態や様子をしっかりと見て、改善を絶えずおこなうというPDCAサイクルにより、取り組みの精度が上がっていったのである。

5. 「居場所づくり」と「絆づくり」

大規模で生徒指導が困難な時には、学校行事にむけて特別活動に取り組む学校が多くある。体育大会、文化発表会、修学旅行、宿泊学習、社会見学、遠足・・・、次から次へと取り組む。これらの活動は非日常的であり、一つのことになかまと取り組み、満足感や成就感を得ることができるからだ。学校を建て直していくには非常に有効な手段であると言える。また、指導する教員も生徒たちの成長ぶりに感激したり、成就感を得たりする。教員にとっても意欲が高まり、「やる気」が出やすい領域といえる。学力向上が叫ばれ、教育課程の中での授業時間数確保のためにはかつてのような学校行事への取り組み方は厳しくなっている。生徒どうしをつなぎ、絆をつくり、生徒どうしが絆を深めていくという意義を踏まえて、そういった場の設定が必要である。既に述べたが、学校行事などだけではなく、授業の中でも生徒どうしをつないでいく工夫が必要である。人権教育をベースとして「認め合い、高めあうなかまづくり」に取り組む学校も多いが、この「認め合い、高めあう」ことこそが「絆づくり」のコアである。生徒どうしがよく知り合い、つながって、協力し合い、認め合っていく。伝統をつくっていくために、良き上級生となろうとし、下級生は良き上級生のようになろうとする。ここにも生徒どうしのつながりが欠かせない。生徒たちはよき集団の中では、集団的な自尊感情が高まり、内在している本来の力を発揮したり、劇的な成長を見せたりするのである。

一方、「居場所づくり」は社会的自尊感情へのアプローチともいえる。生徒が安心して学校へ来ることができる、学校に自分の居場所があると思えるためには、生徒と教員の信頼関係の構築がまず必要である。集団になじめない、学校への登校意欲が低いなどの生徒は生育歴や生育環境に課題があって、基本的自尊感情が低いと言われる。集団の中で社会性などを身につけていくことも学校における大切な学びであるが、教員による一対一の取り組みにより、自尊感情を高め、集団の中にも自分の居場所を見つけることができるようにまずは、教員と生徒がつながっていくのである。

「居場所づくり」と「絆づくり」の取り組みにより、生徒たちがつながっていけば、もちろん学習意欲も高まり、学習成果も出てくる。生徒アンケートにおいても学習面での満足度も高いために、具体的な成果も現れている。例えば、当該市及び中学校の全国学力学習状況調査結果においては、小学校6年生時と中学校3年生時を比較してみれば、かなり大きな伸びが見られるのである。

6. おわりに

中学校における「荒れ」は全国的にも収まりつつある。一方、「荒れ」が低年齢化して、小学校における学級崩壊や「荒れ」が多く報告されている。当該中学校においても、小学校で学級崩壊や「荒れ」をくり返して中学校へ入学してくるという事例がそう珍しいことではない。生徒たちを取り巻く環境は決してよくなっているとは言えず、むしろ格差は大きくなったと言える。経済的理由による要保護および準要保護生徒はかなり増加しているし、外国にルーツをもつ生徒も法改正により一気に増加している。教育的に不利な立場と言える状況におかれた生徒はますます増加していくであろう。生活環境と言うことについては学校にできることは限られているのだが、関係機関との連携を深めて生活環境を整え、様々な困難さにおかれた生徒と向き合い、生徒と教員がつながって信頼関係を深めたいうえで、生徒どうしがつながって集団として成長し、学校生活の満足度を上げること。この地道とも言える教育の本質的な営みをくり返していくことが魅力的な学校をつくっていく。

引用および参考文献

河村茂雄(編著)(2011). 教育委員会の挑戦 「未然防止への転換」と「組織で動ける学校づくり」 図書文化社 101

13-24

河村茂雄(2013). 「学力を支える学級経営」 応研レポート No. 81

文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2017). 第Ⅲ期「魅力ある学校づくり調査研究事業」(平成 26～27 年度) 報告書

園田雅春(2016). 自尊感情が育つ元気教室 解放出版社

志水宏吉・若槻 健(編)(2017). 「つながり」を生かした学校づくり 東洋館出版社

志水宏吉(2008). 公立学校の底力 ちくま新書